

予習を起点にした学び方指導で 主体的な学習サイクルを生み出す

岡山県 倉敷市立柏島かしわじま小学校

倉敷市立柏島小学校は、主体的な学習サイクルを生み出そうと、予習を起点とした「学び方」の指導に重点を置く。予習によって自分なりのめあてや見通しを持って授業に参加し、さまざまな学び方を活用して課題を解決する経験を積み重ねることで、自ら課題に取り組む意識や姿勢が育っている。

取り組みのねらい

- 全ての子どもに基礎・基本を定着させる
- 自分にとってハードルが高い課題にも、主体的に取り組む意欲を育てる
- 家庭や地域と連携して教育の充実を図る

取り組みの内容

- 予習を起点としてめあてや見通しを持つことによって、意欲的に取り組める授業づくりをする
- 学習方略（学び方）を教え、授業や自主学習で活用させる

取り組みの成果

- 基礎・基本が定着するようになった
- 「出来た」「分かった」という成功体験を積み重ねることで、自信と共に主体性が育ってきた
- 予習をはじめとして、子どもに主体的な学習サイクルが定着しつつある

S c h o o l D a t a

◎1873(明治6)年開校の松柏小学校に起源を持つ。2010年「岡山県学力・人間力育成推進会議モデル地域研究指定校」、11年、倉敷市教育委員会「学校力向上」研究指定校として研究を推進。



校長 三宅孝幸先生

児童数 334人 学級数 15学級(うち特別支援学級3)

所在地 〒713-8123 岡山県倉敷市玉島柏島2751-1

TEL 086-522-3076

URL <http://www.kurashiki-oky.ed.jp/school/kashiwajima-e/>

公開研究会 未定

● 取り組みのねらい

「全国学力・学習状況調査」等で
見えてきた4つの課題

倉敷市立柏島かしわじま小学校は、工業地帯のベッドタウンとして発展した地域に位置し、落ち着いた雰囲気のある住宅街にある学校だ。子どもたちは素直で活動的で、学習に対して前向きに取り組む姿が見られる。一方で、文部科学省「全国学力・学習状況調査」等の結果から次のような課題が明らかになった。①算数の学力差が大きく、基礎・基本が十分に身に付いていない子どもがいる、②困難さを感じる課題に対して主体的に課題解決をする意欲が低

主体的に学ぶ力を育む——学び方の工夫で学習意欲を高める

い、③家庭学習習慣や学習スキルの定着の個人差が大きい、④家庭や地域の教育力が低下傾向にある。三宅孝幸校長はこのように語る。

「子どもたちには、社会の役に立つ喜びを感じながら、幸せな人生を送ってほしいと願っています。その素地として、小学校段階では、基礎・基本としての学力、自分で課題を見付けて解決する力、協調性を備えた人間力を育てることを大切にしています」

それらの育成に学校が出来ることとして、「学力」と「体験」を重視する。

「学力は、自分がやりたいことに取り組むための土台となるものですから、しっかり付けたいと思います。そして、多様な体験の場を与え、失敗した理由を考えてやり直したり、皆で一緒にやり遂げる充実感や高揚感に包まれたりする中で、人間的な成長を促していきたいと考えています」(三宅校長)

◎取り組みの内容

その日の学習事項を教えるから十分に考えさせる授業に

そのような課題意識を持つ同校は、「家庭・学校・地域が協働して『人間力』をはぐくむ学校の創造」を研究主題として、「教えて考えさせる授業」に2010年度から取り組んでいる。

「教えて考えさせる授業」とはどのようなものか。基本的な授業展開は、「予習」「教師



* 同校の資料を基に編集部で作成

の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」の5段階となる(図1)。

◎予習 授業内容に見通しを持ち、めあてが意識されて、主体的に授業に取り組めるとの考えから、家庭での予習を指導している。予習の目標は、低学年は教科書を読んで分かった部分に下線を引く、中学年は分からないことをノートに書く、高学年はこれらに加えて、自分のめあてを書くこと。

◎教師の説明 授業では、その時間に初めて学ぶ「基礎的学習事項」を、教科書の基本問題を通して、教師が説明する。教師の一方的な説明ではなく、子どもとのやり取り



倉敷市立柏島小学校
研究主任 小早川祐子(こばやかわ ゆうこ)
「学校が安全で楽しい場であることは大前提。さまざまな出会いや気持ちなど、初めての体験をたくさんさせたい」



倉敷市立柏島小学校校長
三宅孝幸(みやけ たかゆき)
「学校が安全で楽しい場であることは大前提。さまざまな出会いや気持ちなど、初めての体験をたくさんさせたい」

を重視し、具体物を提示するなど、クラス全員が理解できるように丁寧な、かつ具体的な説明を心掛ける。

◎理解確認 教師の説明を子どもが理解できたのかを確かめるため、子どもは同レベルの問題を解き、ペアで説明し合う。

◎理解深化 理解を深めるため、やや難しい問題にグループで取り組む。

◎自己評価 「分かったこと(何をきっかけにどう分かったのか)」「間違えたこと」「よく分からなかったこと」を振り返る。

従来の授業と異なるのは、それまで授業を通して考えさせていた内容を、「大切なこと」として最初に教えてしまう点だ。当初は、この方法に戸惑いを覚える教師もいた。

「多くの教師は、クラスみんなで教科書を読み、問題に取り組みながら、本時の課題を理解していく過程を重視していました。それを、冒頭に教えた内容を全て説明してしまう授業にすることは、大きな転換でした。し

かし、実践を進めるうちに、この展開は子どもたちに基礎・基本が定着しやすいく感じられるようになりました。更に、何を教えて何を考えさせるかを焦点化する必要はありますが、課題解決型の授業と共通点が多いことにも気が付き、そうした認識が教師間に広まるにつれ、この授業形態が定着していきました」(三宅校長)

「教師の説明」では、限られた時間に「何を教え、考えさせるか」を焦点化することがポイントになる。以前にも増して、教材研究や子どもの実態把握に力を入れるようになった。また、学校全体で取り組んでいるので、学年や担当が変わっても、授業の進め方や学習法に変化がなく、子どもが安心して学習に取り組めるのも利点だという。

予習は1年生の後半から行う。初めは1人で家庭で学習するのは難いため、授業の最初にクラス全員で予習に相当する活動を行い、慣れてきたら家庭で取り組ませている。研究主任の小早川祐子先生はこう説明する。

「予習によって、自分が分からないことが明確になれば、『授業で分かりたい』と思うようになります。高学年になると『問題は解けたけど、式の意味が分からない』など、授業を受ける目的がより焦点化されます。クラス全員がそのような状態であれば、最初の課題共有がスムーズに進み、その後の説明や理解深化の時間を多く確保できるのです」

授業や自主学習に生かせる「学び方5」の指導

「教えて考えさせる授業」の導入初年度は、学力面の成果があまり見られなかった。その要因として、子どもが「何をどう学ぶか」という学習方略(学び方)を分かっていることが考えられた。そこで、子どもに知ってほしい学習方略を低学年用、中・高学年用にとり、「学び方5」と名付けて全校に広めた(図2)。例えば、低学年版の「なろう、ミニせんせい」は学習内容を友だちに説明することで、「かこう ずやえ」は図や絵をかくことで、理解が深まることを教えている。授業では、「間違えたのはなぜかな?」「大切なことばは何かな?」など、「学び方5」を意識させるような声掛けをしている。

「学び方5」の内容は、「どうすれば考えやすくなるか」「次に間違えないためにはどうすればいいか」といった学習観(勉強に対する考え方)にもつながり、将来的に、自立した学習者となるために重要となる考え方だ。保護者にも家庭での声掛けに活用してもらうために、「学び方5」を用いた具体的な学習法を紹介する「学び方5だより」を配布している(図3)。

『学び方5』の一つひとつは、これまでも大切にされてきたことであり、先生方は教えてきたと思いますが、それを見える形にして

図3 「学び方5だより」低学年用



「学び方5だより」には、「学び方5」の学習方略を用いて取り組んでいるノートを紹介し、教師がコメントを添える

*同校の資料を抜粋して掲載

図2 学習方略「学び方5」

低学年	中・高学年
ま まちがえたのは、なぜ?	まちがいを大切にする
な なろう、ミニせんせい	説明してみる
び ひとこと、コメントをしよう	一言コメントを書く
か かこう ずやえ	図や絵にかいて考える
た たいせつなことばは、なに?	キーワードを見つける

学習方略を子どもが分かりやすく、覚えやすいように「学び方5」と名付けた。カードにして、全クラスに配布、掲示している

*同校の資料を基に編集部で作成

主体的に学ぶ力を育む——学び方の工夫で学習意欲を高める

皆で共有したことに意味があります。教師が当たり前だと思う学び方でも、意識して繰り返し教えることが大切だと考えています」(三宅校長)

● 取り組みの成果

授業と自学を自ら行きたい
主体的な学習者を育てたい

研究開始から4年目を迎え、子どもの学習に対する意識や姿勢にはどんな変化が見られるのか。まず、いずれの学年でも、予習にきちんと取り組み、授業に前向きに取り組めるようになった。自主学習においても「学び方5」が定着しつつあり、基礎・基本の学力が向上するなど目に見える成果も表れている。自分が言いたいことを明快に話せる子どもが増えたとも、教師は感じている。

「授業では、子どもに大切なことを焦点化した上で考えさせています。そうした授業を繰り返し受けることにより、子どもも大切なポイントに絞って話せるようになってきているだと思います」(小早川先生)

主体性の面でも好影響が見られる。

「見通しを持って学び、分かるようになる」と、『やれば出来る』という自信ややる気につながります。そうした成功体験を積み重ねる中で、『もっと学びたい』という気持ちが生まれ、主体性は育まれるのだと思います」(三宅校長)

同校の最終的な目標は、「教えて考えさせる授業」と「学び方5」の指導の双方のねらいを、子ども自身に理解させ、主体的な学習者を育てることだ。

「予習を通じて、自分が分かったこと、分からないことを自覚し、見通しを持って授業に取り組む。授業では、知識やスキルと共に、効果的に学習するための方略を教わる。そして、家では授業で学んだ内容を再構成し、次の予習につなげる。そうした学習サイクルが理想であり、実際に行う子どもが現れつつあります」(小早川先生)

そのような姿勢を育むために、今後、更に授業改善に取り組んでいく。例えば、「教えて考えさせる授業」は、知識やスキルを教えた上でチャレンジ問題に取り組むことで、基礎・基本の力と共に問題解決の力も育つと捉えている。しかし、「教師の説明」に時間を費やしてしまい、チャレンジ問題の解法の説明にまとまった時間を取れないこともある。そのため、授業構成や教材の研究を更に進めたいと考えている。また、教材研究やワークシートの準備を限られた時間で行うことや、教師が入れ替わっても実践を継続する体制をつくることなども、目下の課題だ。

「教師が一丸となって取り組むことで成果を生み出してきました。これからも、『当たり前』のことにしつかりとやる」という気持ちで取り組みを深めていきます」(三宅校長)

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

研究の方針について、責任を持って最終的な決定を下すことを、校長の役割として大切にしています。先生方にはさまざまな考え方があり、それに耳を傾けることは大切です。しかし、必要な場面では校長がリーダーシップを発揮し、学校として進むべき方向を示さなくてはなりません。そして、研究が動き出したら、人材の配置や資料の収集の仕方など、人やモノに関するさまざまなことをマネジメントする力が問われると思っています。

校長 三宅孝幸先生

ミドルリーダーの役割

研究の方向性を具体的なイメージとして示し、手立ての共通理解を図ることを心掛けています。自分1人で抱え込まず、低・中・高学年それぞれのリーダーと話し合う時間を定期的に持つようにしています。

常に方向性が合っているかを見つめることを大切にしていますが、時には、先生方の思いが違うこともあります。そのような時は改善策を見だし、全体でも共有するようにしています。

研究主任 小早川祐子先生